

ぎょう じ めん
行 司 免 遺 跡

遺 跡 番 号	平成16年度登録
調 査 次 数	第3次
所 在 地	鶴岡市大字水沢字行司免
北緯・東経	38度42分42秒・139度44分32秒
調査委託者	国土交通省東北地方整備局酒田河川国道事務所
調 査 原 因	日本海沿岸東北自動車道（温海～鶴岡）建設
調 査 面 積	2,100㎡
現 地 調 査	平成18年4月17日～11月30日
調査担当者	鈴木良仁（調査主任）、向出博之、佐藤正俊、深澤 篤
調 査 協 力	東日本高速道路株式会社東北支社鶴岡工事事務所、庄内教育事務所、鶴岡市教育委員会
遺 跡 種 別	墓域
時 代	奈良時代、平安時代
遺 構	木棺墓、溝跡、ピット、河川跡
遺 物	土師器、須恵器、赤焼土器、木製品 （文化財認定箱数：144）



調査の概要

行司免遺跡は、県教育委員会の分布調査を経て平成16年度に新規の遺跡として登録され、遺跡範囲の一部が日本海沿岸東北自動車道の路線内にかかるため、県教育委員会と当時の日本道路公団東北支社との間で遺跡の取り扱いについて協議が行われた。その結果、記録保存のための緊急発掘調査を財団法人山形県埋蔵文化財センターが行うことで合意した。

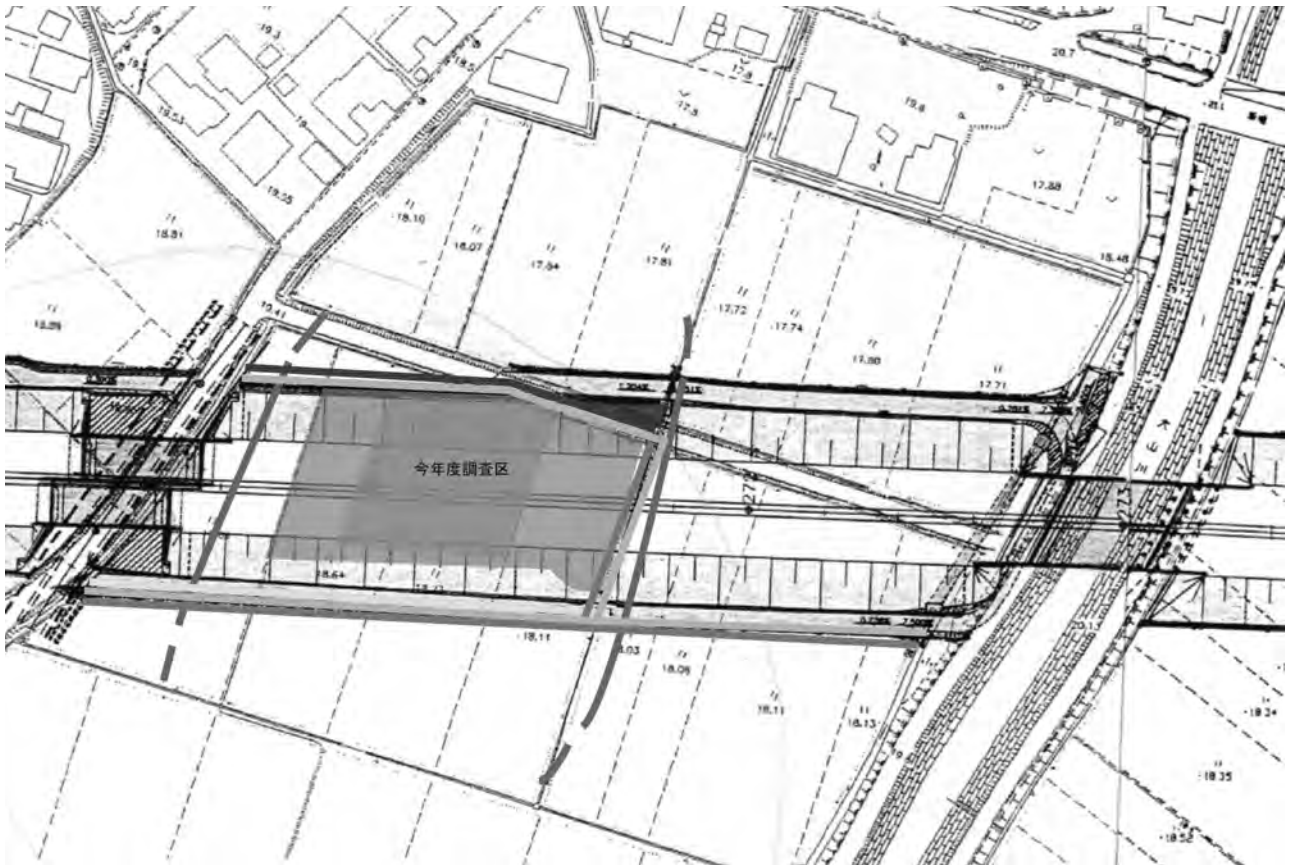
平成16年度に実施された用排水路の切り回し工事に先立つ1次調査によって、平安時代の集落跡と確認され、

平成17年度に3,600㎡を対象に2次調査を行った。調査が進むにつれ下層から奈良時代末頃の土器がまとまりを持って出土することがわかり、今年度に3次調査を行うことになった。

4月17日より調査を開始したが、調査の過程で当初予想した層のさらに下の層にも遺構・遺物が存在することがわかり、試掘の結果ほぼ遺跡全面に拡がることが確認された。そのため関係機関による協議を行い、11月30日まで調査期間を延長し、新たに確認された文化層を発掘することとなった。



写真1 平成17年撮影 調査前風景（西から）



遺構と遺物

昨年度と今年度の調査成果から、行司免遺跡では奈良時代末から平安時代前半頃までの文化層が確認された。

遺物の取上げは、堆積の新しい方から便宜的にⅠ～Ⅲ層として取り上げ、一部Ⅳ層として取り上げた遺物もある。

火山灰の存在や土器の様相などから、Ⅰ層は10世紀前半頃、Ⅱ層は9世紀～10世紀頃、Ⅲ層は奈良時代末から平安時代始め頃という年代が考えられる。

今年度も昨年度と同じように、木棺墓・溝跡や炭化物の集中箇所を中心とした遺構が見つかったが、直接生活に係わる井戸跡や建物跡などは見つからなかった。

(溝跡)

溝跡は昨年度と同様に、幅が狭く等間隔で主に主軸が南北方向でほとんど遺物を含まない溝（写真2）と、幅が広く深さがあり南北方向のSD4や、北東方向にのびるSD5（写真3）が見つかった。

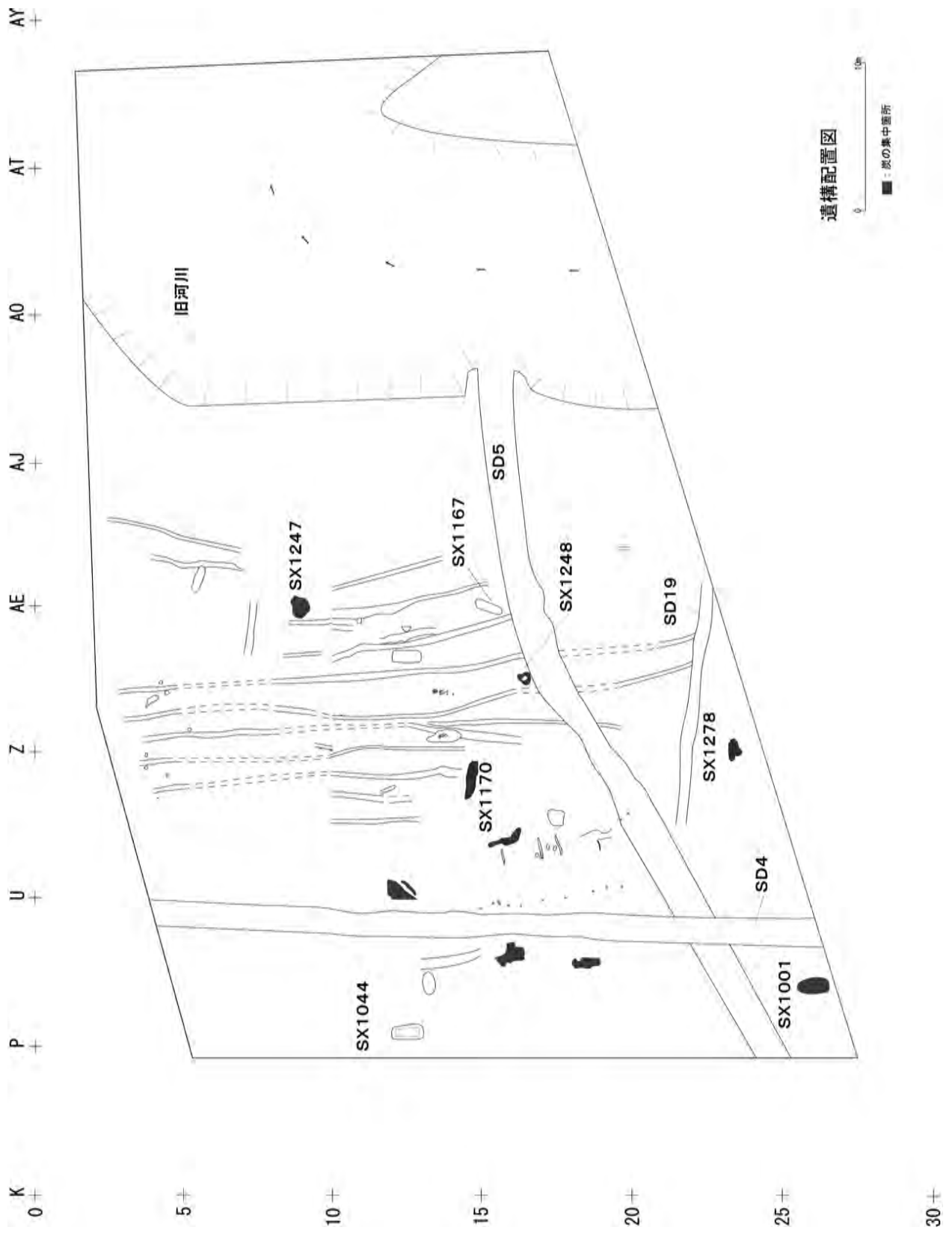
調査区中央寄りの南北方向の溝はほぼⅠ層で検出し、遺物はほとんど出土しなかった。調査区の中央部では比較的明瞭にプランを確認できたが、北側や南側では一部

を除いてプランを確認できなかった。幅は30～40cmで、長さは確認できた範囲で30～40mほどである。溝の底部には粗砂が縞状に堆積し、水が流れたことが窺えるが、性格は不明である。

II層で確認された溝も、I層と同じように調査区中央部を除いてプランの確認が難しかった。やや西寄りに主軸が振れ、この溝の場合も底部には粗砂が縞状に堆積する状況が見られた。

SD4は覆土の上層から十和田a火山灰が検出されており、調査時の所見や火山灰の分析結果から、火山灰の降下時には溝としての機能がほとんど失われていたと考えられる。遺物は赤焼土器の坏が主体で、完形や半完形を中心に数多く出土した。次いで赤焼土器の小型甕や甕が僅かに出土し須恵器の出土はほとんどなかった。

SD5はSD4よりも古く、Ⅱ層を掘り込んでつくられている。土層断面の観察では、大きく2つの溝の断面の切り合いが認められ（SD5a・SD5b）、遺物を極力区別して取り上げる努力をしたが、切り合いが明瞭でない箇所はSD5として取り上げた。出土した遺物はSD4より少ないが、須恵器の割合が多くなる。



遺構配置図



写真2 南北方向の溝（北から）



写真3 SD5完掘状況（西から）



写真4 炭化物集中箇所（調査区中央部） 南から



写真5 SX1170掘下げ状況



写真6 SX1248掘下げ状況

(炭化物の集中箇所)

今年度の調査で最も多くの遺物が出土したのが炭化物の集中箇所である(写真4)。炭化物の集中箇所は大きく4つの種類に分けることができる。

種類①は溝状に植物を燃やした炭が堆積し、遺物を多く含むものである(写真5)。今回の炭化物の集中箇所でも数が多い。SX1170からは板状の木製品や、焼けた礫・須恵器甕の破片・土師器などが出土した。

種類②は円形で深く掘りこんでおり、植物を燃やした炭が堆積して、遺物を多く含んでいる(写真6)。この種の遺構はSX1248の1基のみであり粘土層と炭化層が互層になっており、板状の木製品や焼けた礫・須恵器坏が出土した。炭化層からは桃の種や炭化米が出土した。8世紀末から9世紀初めの土器が伴っている。

種類③は形は不正形で炭が厚く堆積するが、植物が自然炭化したと考えられるもので、遺物はほとんど含まない。SX1278などがあるが数は少ない(写真7)。

種類④は形は不正形で木を燃やした炭が分布し、遺物をほとんど含まないもの(写真8)。SX1247は、いわゆる消し炭が分布するもので、焼土は認められなかった。

(火葬に関わる施設 仮称)

今年度の調査では火葬に関わる施設SX1001(写真9)が検出された。掘り方の規模は長さ170cm・幅85cmである。炭層の中には数多くの骨片や焼土ブロックが僅かに含まれたが、炭層底部には焼土が認められなかった。炭層直下からは土師器坏の底部が出土し、炭層の下には粘土質の無遺物層があり、その下からは角材や櫛・曲げ物が出土した。炭層とその下から出土した角材や櫛・曲げ物などは埋葬に係わる一連の行為の結果と考えられるが、これらのものが火葬施設なのかも含めて検討が必要なので、仮称とした。時期は土師器の坏から10世紀の前半と考えられる。(写真10)。

(木棺墓)

今年度は2基の木棺墓を検出した。SX1044(写真11)とSX1167(写真12)である。

SX1044は長さ190cm・幅65cmで、蓋板と底板、それに底板を支える横木が残っていた。

SX1167は長さ120cm・幅50cmで、底板と横木が残っていた。

また、SX1044の東側から「^{あのう}穴太」と墨書された須恵



写真7 SX1278掘下げ状況



写真8 SX1247掘下げ状況



写真9 SX1001炭層調査状況

器坏が2点出土した(写真13)が、木棺墓との関係は今後の検討課題である。

なお火葬施設と木棺墓については、昨年度出土した2基も含め、5基すべての遺構切取を行い、当センターに持ち帰って室内で遺構精査(写真14)と保存処理を行っている。保存処理は東北芸術工科大学文化財保存修復研究センターに委託した。



写真10 SX1001炭層掘下げ状況



写真13 墨書土器「穴太」



写真11 SX1044掘下げ状況



写真14 木棺墓の精査の様子



写真12 SX1167掘下げ状況

(出土した遺物)

土器に関しては、Ⅱ層よりⅢ層と下層に行くにしたがって赤焼土器より須恵器・土師器の割合が多くなる傾向が見られ、供膳形態はⅡ・Ⅲ層ではほとんどが須恵器で、煮沸形態でもⅢ層では土師器の長甕が見られた。

金属器は包含層の出土であるが、鉸具と帯金具と考えられる鉄製品がそれぞれⅡ層から出土した。

ま と め

昨年と今年の調査から、8世紀の終わり頃から10世紀前半頃までの人々の活動の痕跡が認められた。成果を箇条書きで示すと以下になる。

- ① 昨年度と合わせて4基の木棺墓と、火葬施設と考えられるものが検出された。このことから、行司免遺跡の周辺が墓域の一部であったことが確認された。
- ② 昨年度出土した「富寿神宝」や今年度「鉸具」が出土したことから、近くに官衙に関わる施設が存在する可能性が高く、木棺墓や火葬に関わる施設との関わりも想定される。
- ③ 秋田城跡の漆紙文書や木簡に記された人名と同じ、「穴太」と記された墨書土器が出土した。

以上3点のほかに、今後の整理の中で炭化物の集中箇所がどのような性格なのか、また木棺墓や火葬施設との関わりを追求することで、行司免遺跡の持つ性格が明らかになると考えられる。